Japanese Association for Religious Studies

親鸞における善光寺信仰について

安藤章仁

親鸞の善光寺信仰を問うということは、単に親鸞における善光寺信仰の有無を論ずるものではない。そのことは、教義的に純粋化した近代的親鸞観を再構築するとともに、貴族的な仏教信仰が民衆化し、念仏が普及するプロセスを解明するものである。

それでは、善光寺信仰の内実はどのようなものであったのか。建久二年（一一九一）、善光寺が復興されると、善光寺信仰は急速に広まり、多くの分身仏や新善光寺が作られ、人々の信仰を集めるようになった。その様子は、『吾妻鏡』『平家物語』『沙石集』といった同時代の歴史書や説話文学の中で語られている。その信仰内容は多岐にわたるが、追善供養、願生浄土、女性救済、悪人救済、生身如来、納骨霊場、滅罪信仰といったキーワードに看取される。

善光寺信仰で特筆すべきことは、善光寺如来と聖徳太子が並列的に信仰されていることである。『善光寺縁起』には、善光寺如来と聖徳太子の三度にわたる消息往来の説話が記載され、両者の深い関係が説かれている。この伝承に浄土教者も注目し『法然上人行状絵図』、顕智の『聞書』『見聞』、託何の『蔡州和伝要』、存覚の『存覚袖日記』『報恩記』、『聖徳太子内因曼陀羅』等に収載されている。さらに両者は、絵伝にも密接な関係があり、相互に対応して製作されたことが明らかになっている。ではなぜ、善光寺如来と聖徳太子が同時に信仰されたのであろうか。この問題は、中世に模刻された善光寺式阿弥陀如来像の像造銘や、聖徳太子十六歳孝養像の胎内銘によって明らかになる。両者の銘文には、当時の人々の信仰内容が如実に語られており、ともに像造に結縁するのは、先に見た善光寺信仰のキーワードに共通する内容であったことを伝えている。この共通する信仰が、末法到来の時代に異なる信仰対象を結びつけることを可能にしたのである。そしてその結合を実現させたのが、高野聖とともに精力的に活動した善光寺聖と呼ばれる念仏聖集団であった。彼らは、共有する磯長太子廟の信仰を媒介として全国各地を行脚し、念仏堂や太子堂で不断念仏を行い、名帳運動を展開しながら、多くの結縁者を得ていったのである。

親鸞が勧進聖であったことは、「安城御影」と親鸞消息中の文言から明らかである。親鸞八十三歳の姿を描いた「安城御影」には、膝下に狸の敷皮、手前には猫皮製の草履と猫皮を巻いた鹿杖といった僧侶の旅支度に関わるものが描かれており、親鸞が遊行聖であったことを示している。そしてその聖性については、親鸞消息中の金銭授受の記載にうかがうことができる。すなわち、親鸞の消息からは、親鸞の経済的生活基盤について、謝礼を申し添える個人的な懇志である「御こゝろざしのもの」と、受領した金額のみを記す念仏勧進によって得られた特殊な懇志である「念仏のすゝめもの」との二種類があったことが知られる。そして「念仏のすゝめもの」の存在こそ、親鸞が上級勧進聖としての得分を受け取っていた証左であり、親鸞が勧進聖であったことを実証している。そして勧進聖の勧進内

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

容については、親鸞の関東での足跡が、善光寺聖の勧進活動圏とその経路に一致する点、真宗高田派本寺に伝来する善光寺式一光三尊仏、親鸞伝絵における「入西鑑察」や初期真宗教団で依用された四種の絵伝群から善光寺聖であったと措定することができる。

しかしながら親鸞の思想には、善光寺信仰は皆無に等しい。では、親鸞における善光寺信仰はいかなる意味を持つのであろうか。善光寺信仰の歴史的意義は、三国伝来の仏教、就中、浄土教を一般に弘めたところにある。この点に親鸞は着目し、聖徳太子信仰とともに仏教界に対しては念仏相承の正統性を、布教伝道においては三尊信仰を重用したのである。そして親鸞は、光明本尊の構成においてそのことを高度に具象化したのである。

存覚上人の行信理解における一考察

川野　寛

存覚における行信論を窺うに当たって、鍵となる語は能所という語である。なぜなら行信を論じられる際に存覚は、親鸞が用いられていない能所の語をもって為されるからである。

伝統宗学において大行論で用いられてきた能所の用法とは異なり、能所の用語は行信に亘っての解釈であることがうかがい知れる。存覚の行信論は明確に「所行能信」と示されるものである。能行能信、所信能信示、所行能行とも示されず所行能信と示されるところに存覚の行信論の特徴がある。所行が機に至りて能行となるのではなく、大行とはどこまでも仏の所行、所帰の法のままである旨を示されている。ではなぜ宗祖の上で用いられていない所行という語で大行を明かされたのかという問いが起こるが、これはただひとすじに宗祖の顕彰された「他力回向義」の顕示のためであると考える。所信能信と示せば、名号が現行というよりも向こう側に眺めていうような、一種の抽象的な理である感を受ける。能行能信という語で示せば、仏の行というものが機についての行という感を受ける。

存覚において仏の行（所行）の他、まったく衆生の行なしという意で、どこまでも所行のままである。行者が称えたら能行になるのではなく所行のままである。機において称えられてもどこまでも所行のままというのが他力回向の大行の義である。存覚においては今現にすでに所行海の中に身を置いて、存覚の口をついて名号が称えしめられているという現行の所談である。その際所行能信という語は、他力回向義の顕彰にもっとも適した用語であったのであろう。後世の能行ということも所行の法に込められて説かれている。では存覚において能行とはなにを指すのかという問題であるが、能の配当はやはり機につくべきではないだろうか。「能修の行者」「念仏人」「能行の人」と示されるが如く能行はやはり能信の機に配当されるべきものと考える。

次に信、能信の解釈であるが、宗祖においても信のはじまりは行巻にはじまるのであるが、存覚においても行巻釈においてしばしば能信の釈が施されている。伝統宗学における能所は主に大行論での所論であるが、存覚において能は信の解釈中であ

NII-Electronic Library Service